

平成14年度

なが の い せき  
永 野 遺 跡

株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ九州携帯電話  
無線基地局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2003. 3

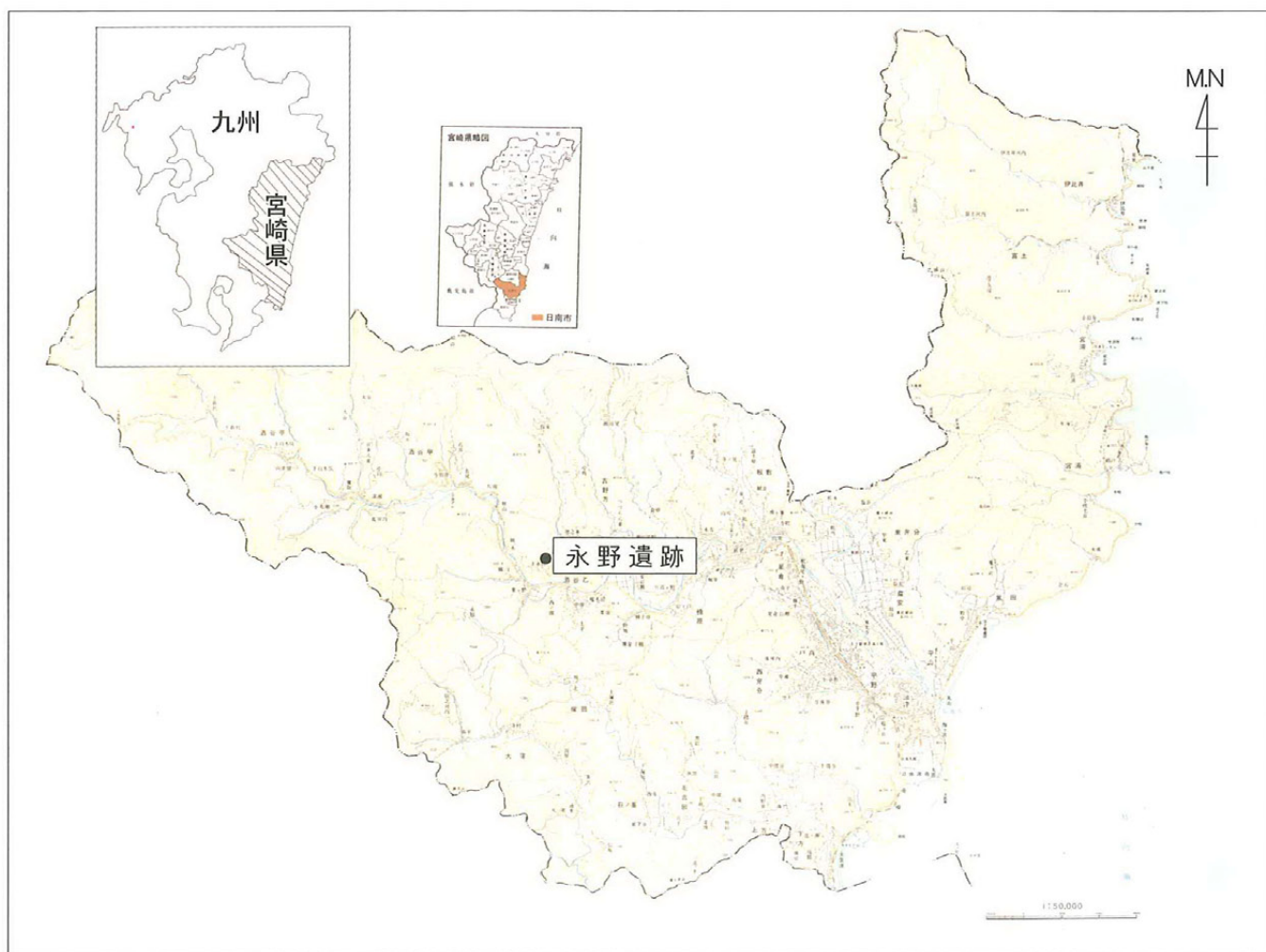
宮崎県日南市教育委員会



平成14年度

なが の い せき  
**永 野 遺 跡**

株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ九州携帯電話  
無線基地局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2003. 3

宮崎県日南市教育委員会

## 序

この報告書は、平成12年度に株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ九州より、受託して発掘調査を実施した携帯電話無線基地局建設に伴う永野遺跡の報告書です。本調査は、株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ九州より委託され、日南市教育委員会にて実施しました。

本市においては、平成元年及び2年に遺跡詳細分布調査を実施いたしました。その後は、遺跡詳細分布図に基づき各種開発に先立ちまして確認調査を実施してまいりました。また、周知の埋蔵文化財包蔵地に含まれない地域での開発につきましても、遺跡存在の可能性がある場合には、試掘調査等も実施し文化財の保護とその啓発に努めております。

これまでの主な調査実績としては、縄文時代早期の遺跡が4箇所、弥生時代の集落遺跡が2箇所、狐塚古墳、飢肥城跡などが挙げられます。

今回の調査では、調査対象面積が非常に狭く、傾斜地であったため、遺構は特に検出されませんでした。しかしながら、集石遺構のものと推察される焼けた痕跡が顕著な礫などが多数検出されました。遺物の面からみるとアカホヤ火山灰層がはっきりと確認され、その上層部からは、縄文時代後期の市来式土器などが検出されました。また、その下層部からは、早期の縄文土器が検出されました。今回調査を実施した酒谷地区では、数多くの縄文時代の遺跡が確認されているものの本調査が実施された遺跡は、本遺跡が初めてです。

この報告書が、学術資料としてはもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、生涯学習や学校教育の場、地域における公民館活動の場など幅広く活用されれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、本調査にあたり格別のご指導、ご助言を賜りました宮崎県文化課、宮崎県埋蔵文化財文化財センターの方々には厚くお礼を申し上げます。また、調査にご支援とご理解を賜りました関係各位、地元の方々、調査及び整理作業に従事していただいた方々にも重ねてお礼を申し上げます。

平成15年3月

日南市教育長 松田 惟 怒

## 例 言

1. 本書は、携帯電話無線基地局建設に伴い2000年に実施された埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ九州に委託され、日南市教育委員会が受託して行った。
3. 調査の体制

〔平成12年度〕（発掘調査を実施）

調査主体	日南市教育委員会	
	教 育 長	倉山 久信
	社 会 教 育 課 長	石井 孝一
	課長補佐兼文化係長	岡本 武憲
庶務担当	教育総務課主事	古澤ヒデ子
調査担当	文化係主事	的場 文明
	調 査 補 助 員	鎌田留次郎、鎌田 和枝、黒木 正男、黒木 カヨ、田畑フミ子、 前田マサ子、福田 スエ、大田原俊太郎、岩永 良典、谷口キヨ 子、長友ヤツミ 杉元 早苗、杉元 香代、金丸恵美子、平川フ ミオ、倉元ハツエ、山室 光（福岡大学学生）他

〔平成14年度〕（整理作業及び報告書刊行）

調査主体	日南市教育委員会	
	教 育 長	松田 惟怒
	社 会 教 育 課 長	石井 孝一
	課長補佐兼文化係長	岡本 武憲
庶務担当	教育総務課主事	戸田 芳子
調査担当	文化係主事	的場 文明
整理作業	整 理 作 業 員	山内 豊喬

4. 現地調査は、的場が行った。
5. 現地における実測は、的場、鎌田(留)、山室、が行った。
6. 遺構の実測及びトレースは、的場が行った。
7. 遺物の実測及びトレースは、的場が行った。
8. 本書に掲載している出土遺物写真については、西大寺フォト 杉本和樹氏の撮影による。
9. 空中写真撮影については、(株)スカイ・サーベイの森氏による。
10. 本書における方位は真北、レベルは海拔高である。
11. 出土品は、日南市教育委員会にて保管している。
12. 本書の執筆編集は、的場が行った。

## 本文目次

第I章	はじめに	
第1節	調査に至る経過	3
第II章	遺跡の概要	
第1節	遺跡の立地と環境	3
1.	地理的環境	3
2.	歴史的環境	3
第2節	遺跡の概要	8
1.	基本層序	8
2.	調査区設定及び遺構	8
3.	遺物	8
	(ア)土器	8
	(イ)石器	8
第III章	調査	
第1節	遺構	11
第2節	遺物	11
1.	土器	11
2.	石器	14
第IV章	まとめにかえて	14

## 挿図目次

第1図	永野遺跡位置図	1
第2図	永野遺跡周辺地形図	6
第3図	永野遺跡基本土層図	8
第4図	永野遺跡調査区設定図	7
第5図	永野遺跡出土遺物分布図	9
第6図	永野遺跡アカホヤ層上部出土遺物分布図	10
第7図	永野遺跡アカホヤ層下部出土遺物分布図	12
第8図	土層断面図(北西～南東断面)	13
第9図	出土遺物実測図(その1)	15
第10図	出土遺物実測図(その2)	16

## 表目次

第1表	遺跡番号及び遺跡名対照表	2
第2表	出土土器観察表	18

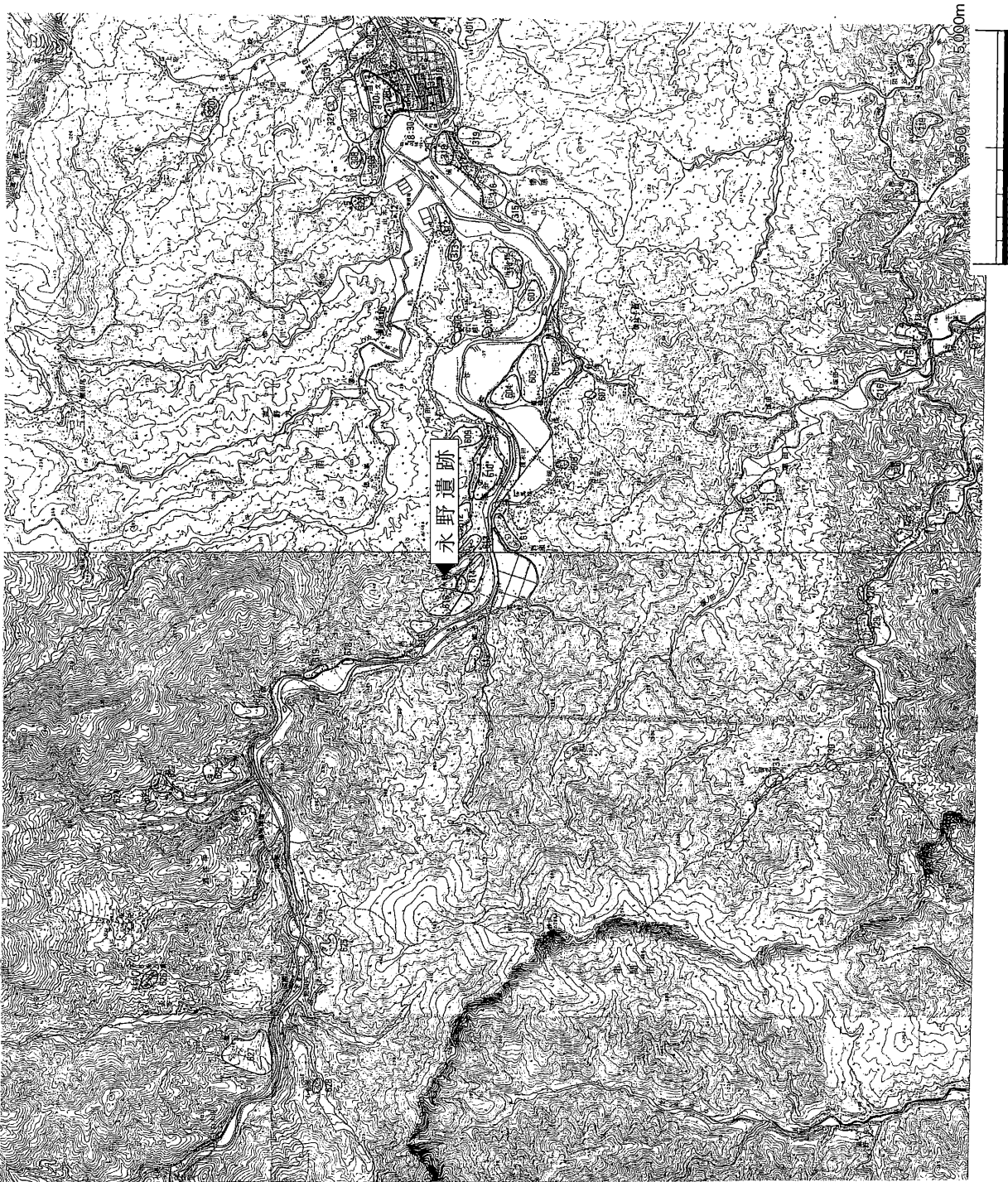
## 図版目次

図版1	永野遺跡調査前全景(航空写真)	19
図版2	永野遺跡調査後全景(航空写真)	20
図版3	土層断面(北西～南東断面)	21
図版4	着工前状況	22
図版5	アカホヤ層上部遺物検出作業状況	23
図版6	アカホヤ層上部遺物検出状況	24
図版7	アカホヤ層下部遺物検出作業状況	25
図版8	アカホヤ層下部遺物検出状況	26
図版9	アカホヤ層下部遺物検出状況及び完掘状況	27

図版10	発掘調査体験学習の様子(酒谷小学校のみなさん).....	28
図版11	発掘調査体験学習の様子(飢肥城下町文化財愛護少年団のみなさん).....	29
図版12	出土遺物測量及び取り上げ作業の状況.....	30
図版13	出土遺物(土器).....	31
図版14	出土遺物(土器、石器).....	32

永野遺跡位置図

MN  
4+



第1図



遺跡番号	名称	所在地	種別	時代	遺跡番号	名称	所在地	種別	時代
302	談義所遺跡	大字今町字広木田	散布地	縄文～中世	611	酒谷城跡	大字酒谷乙字城ノ下	城跡	中世
303	糺遺跡	大字板敷字中島田	散布地	平安～中世	612	下永野遺跡	大字酒谷乙字下永野	散布地	縄文～近世
307	西山寺遺跡	大字板敷字西山寺	散布地	縄文～中世	613	迫間遺跡	大字酒谷乙字迫間	散布地	縄文～中世
308	上永吉遺跡	大字吉野方字楠木原	散布地	中世	614	下原遺跡	大字酒谷乙字下原	散布地	縄文～近世
309	片平遺跡	大字吉野方字片平	散布地	縄文～中世	615	永野遺跡	大字酒谷乙字永野	散布地	縄文～近世
310	鉄肥城跡	大字楠原字舞鶴跡	城跡	中世～近世	616	今別府原遺跡	大字酒谷乙字今別府原	散布地	縄文～近世
311	鉄肥城下町	大字楠原字板敷地	城下町	近世	617	鯛ノ子遺跡	大字酒谷乙字鯛ノ子	散布地	縄文～近世
312	篠ヶ城遺跡	大字吉野方字篠ヶ城	跡	縄文～中世	618	秋山南遺跡	大字酒谷甲字秋山	散布地	近世
313	上ノ原遺跡	大字吉野方字上ノ原	散布地	縄文～中世	619	秋山遺跡	大字酒谷甲字秋山	散布地	縄文～近世
314	川辺ヶ野遺跡	大字吉野方字川辺ヶ野	散布地	縄文～中世	620	片頭遺跡	大字酒谷甲字片頭	散布地	縄文～近世
315	八幡原遺跡	大字楠原字八幡原	散布地	中世	621	名尾遺跡	大字酒谷甲字名尾	散布地	縄文～近世
316	原坂ノ上遺跡	大字楠原字原坂ノ上	散布地	縄文～中世	622	石原遺跡	大字酒谷甲字石原	散布地	縄文～近世
317	諏訪ノ馬場遺跡	大字楠原字諏訪ノ馬場	散布地	縄文～中世	623	石原西遺跡	大字酒谷甲字石原西	散布地	縄文～中世
318	上城跡	大字楠原字上城	城跡	中世	624	中尾遺跡	大字酒谷甲字中尾	散布地	中世
319	大原道遺跡	大字楠原字大原道	散布地	中世	625	下荒河内遺跡	大字酒谷甲字下荒河内	散布地	中世
320	寺ノ尾遺跡	大字板敷字寺ノ尾	散布地	弥生～中世	626	日永八重遺跡	大字酒谷甲字日永八重	散布地	近世
321	堂之元遺跡	大字吉野方字堂之元	散布地	中世	627	鷹取遺跡	大字酒谷甲字鷹取	散布地	近世
322	大迫寺麿寺跡	大字吉野方字大迫寺	寺院跡	中世	628	小布瀬遺跡	大字酒谷甲字小布瀬	散布地	縄文
401	堰ノ尾岩跡	大字星倉字栗殿城	城跡	中世	713	東遺跡	大字塚田乙字東	散布地	弥生～近世
434	川北一遺跡	大字隈谷乙字川北一	散布地	弥生～平安世	714	大野遺跡	大字塚田乙字大野	散布地	弥生～近世
435	平原遺跡	大字隈谷丙字平原	散布地	縄文～中世	715	井手ヶ原遺跡	大字塚田乙字井手ヶ原	散布地	弥生～近世
601	酒谷上床遺跡	大字酒谷乙字上床	散布地	縄文	716	燕黒遺跡	大字塚田乙字燕黒	散布地	弥生～中世
602	鎌ヶ倉遺跡	大字酒谷乙字鎌ヶ倉	散布地	縄文～近世	717	坂ノ上遺跡	大字塚田甲字坂ノ上	散布地	縄文～近世
603	愛宕越遺跡	大字酒谷乙字愛宕越	散布地	中世	718	中苑遺跡	大字塚田甲字中苑	散布地	縄文～近世
604	宮ノ下遺跡	大字酒谷乙字宮ノ下	散布地	縄文～近世	719	新城跡	大字塚田字新城	城跡	中世
605	宮ノ原遺跡	大字酒谷乙字宮ノ原	散布地	縄文～近世	726	苦木遺跡	大字塚田字苦木	散布地	縄文
606	種子田遺跡	大字酒谷乙字種子田	散布地	縄文～近世	727	横当遺跡	大字大窪字横当	散布地	縄文～近世
607	野地遺跡	大字酒谷乙字野地	散布地	近世	728	五郎遺跡	大字大窪字五郎	散布地	弥生～近世
608	下村遺跡	大字酒谷乙字下村	散布地	縄文～近世	729	前畑遺跡	大字大窪字前畑	散布地	縄文～近世
609	鵜戸谷遺跡	大字酒谷乙字鵜戸谷	散布地	縄文～近世	730	開田遺跡	大字大窪字開田	散布地	近世
610	蜂久保遺跡	大字酒谷字蜂久保	散布地	弥生～近世	731	野入遺跡	大字大窪字野入	散布地	縄文

第1表 遺跡番号及び遺跡名対照表

# 第Ⅰ章 はじめに

## 第1節 調査に至る経過

日南市においては、平成7年頃から携帯電話大手3社による携帯電話無線基地局の建設が、断続的に行われてきた。携帯電話無線基地局の建設においては、事前に文化財所在の有無について照会が行われてきた。平成元年～平成2年に実施した遺跡詳細分布調査において周知に埋蔵文化財包蔵地となっているエリアでの基地局建設は、言うまでもないが、周知の埋蔵文化財包蔵地でないエリアについても原則として、試掘調査を実施した。

こういった状況の中、平成11年度に(株)エヌ・ティ・ティ・ドコモ九州による酒谷地区における携帯電話無線基地局の建設予定地の確認調査を実施した。当該開発予定地は、酒谷川の兩岸に点在する河岸段丘上の遺跡で615番永野遺跡に該当した。標高は、約100メートル程で、縄文時代～近世の散布地であった。

確認調査の結果、アカホヤ火山灰層の上、下層から遺物包含層が確認された。この調査結果を基に(株)エヌ・ティ・ティ・ドコモ九州と遺跡の取り扱いについて協議した。本市としては、遺跡の存在が確認されたので、携帯電話無線基地局の建設にともなっては、本調査が必要であると判断し、調査への理解と協力をお願いした。その後、調査に係る期間等について最終的な協議・調整を行い、本調査を行うことで合意した。

# 第Ⅱ章 遺跡の概要

## 第1節 遺跡の立地と環境

### 1. 地理的環境

日南市の地形は、山地・平野・海岸から構成されている。市域の大部分を占める山地は、丘陵性山形をなし、市のほぼ中央を流れる広渡川を境として西半分と東半分に分けられる。西半分は、南那珂山地の一部を除いては、なだらかな丘陵地形を形成しているのに対して、東半分は比較的急峻な一つの独立した山地を形成しており鵜戸山塊と呼ばれている。この地形の違いは、東半分が浸食に比較的強い宮崎層群からなるのに対し、西半分が浸食に対する抵抗力の比較的弱い日南層群から形成されていることに起因しているものと思われる。しかし、日南層群地域でも、北西部や西部の奥地となると砂岩に富む比較的堅固な地層からなるので急峻な地形を残しており、標高千メートルに近い小松山や男鈴山等の本地域の最高峰群を形成している。

日南層群は、そのほとんどが純海成層で岩層的には砂岩層、砂岩頁岩互層、頁岩層からなり頁岩層がその大部分を占めている。日南層群下層部では、150～200メートルの厚さで頁岩を主としており、中層部は流紋岩質凝灰岩をはさむ砂岩にはじまり厚い頁岩に終わる一堆積輪廻を示し、300～500メートルの厚さに達する。上層部も砂岩にはじまり頁岩に終わる一堆積輪廻を示すが、層厚は南東部で200メートルを測り、北西部に向かい減じて100メートル以下となる。

日南層群はこれまでの産出化石から新生代古代三紀に比定され、絶対年代で3300万年前～1500万年前と考えられる。また、最近酒谷川上流や殿所等からネレイテスと呼ばれる生痕化石（TRACE FOSSILS）の一種だと推定されるものが発見されている。これは環虫類（ごかいのようなもの）がはった跡の化石のことで、環虫類の化石を指すものではなくその這った跡（生存していた状況を示す跡）そのものを示す化石をさしてこう呼称する。

今回調査を実施した永野遺跡は、標高約100メートルで、酒谷川の北側河岸段丘上に存在する縄文時代の散布地である。日南市を東西に流れる酒谷川の兩岸には、良好な立地条件から多数の遺跡が確認されているが、本遺跡もそのひとつである。平成11年度は、酒谷川を挟んで飢肥城跡の対岸に立地する上城跡遺跡の本調査も実施されている。

### 2. 歴史的環境

日南市内の遺跡分布調査によれば、確認されている遺跡は山間部をぬって流れる広渡川、酒谷川、細田川などの河川沿いに形成された狭い平野部に隣接する形で存在する丘陵部に多く分布するようである。また、国の伝統的建造物群保存地区に指定されている飢肥地区はその城下町全域を遺跡（311）として周知の埋蔵文化財包蔵地としている。鵜戸地区やリゾート施設の並ぶ宮浦地区などの日南海岸沿いにも、丘陵上や微高地において縄文時代などの遺跡の分布が確認される。

旧石器時代については、これまで遺跡は確認されていない。

縄文時代については、市域において約60ヶ所の遺跡が確認されている。特徴としては早期と後期の遺跡が多いことである。早期の遺跡としてこれまで5遺跡について、調査済であるが、なかでも早期の竪穴式住居

跡12軒と集石遺構19基が検出された坂ノ上遺跡(717)は、県内でも最大級の集落遺跡である。このほかの縄文時代早期の遺跡では、平成8年度に調査を実施した川辺ヶ野遺跡にて貝殻文系の土器片を検出し、遺構としても集石遺構を7基検出している。なかでも7号集石遺構はその形状が舟形を呈しており、隣県の鹿児島県内ではいくつか検出例があるものの日南市内、南那珂地域では初めての検出となり貴重な資料といえる。また、平成11年度に調査を実施した上城跡遺跡では、本市では初めて縄文時代早期の貝殻文系の土器がまとまった形で検出された。主には、加栗山式土器で本市において、形式的に分類できるだけのバリエーションと数がそろった遺物が検出できた遺跡は、この上城跡遺跡が初めてである。縄文時代後期の遺跡としては市来式土器を中心にした後期縄文土器を多量に出土した上講遺跡(407)がある。上講遺跡では、このほか土製円盤や磨石なども出土している。これらの遺跡の他、殿所遺跡(212)や川北三遺跡(433)などが縄文時代の遺跡として確認されている。前述した上城跡遺跡でも市来式土器は、多数検出されている。

弥生時代については、これまで16ヶ所の遺跡が確認されている。平成7年度に影平遺跡の調査を実施するまでは、弥生時代の遺跡調査では、飢肥城下町遺跡や上講遺跡などで土器等が出土していたものの住居跡等の集落遺跡は、確認されていなかった。弥生時代の遺跡は日南市域においては、段丘上や山裾の丘陵地などに限られており、低地での遺跡は、平成7年度に九州電力(株)日南営業所の新社屋建設に伴う試掘調査で、非常に状態の悪い土器片を数点検出できたことをのぞいては確認されていない。

弥生時代の遺構を伴う遺跡としては、前述のとおり平成7年度に実施した影平遺跡において、弥生時代中期の集落遺跡が検出された。同遺跡では、住居跡4軒や土坑8基を検出でき、遺物も中期の山之口式土器等の遺物を中心に瀬戸内系の鋸歯紋を有する土器や波状紋土器、円形浮紋を有する土器、石皿、磨り石、磨製石鏃など多種多様に出土している。また、これに続く時代の遺跡として平成8年度に調査を実施した「大園遺跡」があげられるが、同遺跡からは、弥生時代終末期の住居跡や土坑が3基確認されている。また、出土遺物においては、古墳時代初頭のものと思われる遺物も多数出土している。

この他、平成10年度に調査を実施した楠原坂ノ上遺跡では、遺構などは検出されていないものの弥生時代後期後葉の「下那珂式土器」のほぼ一個体分の検出がされている。

古墳時代の遺跡や墳丘で市内で確認されているものでは、県指定の細田古墳(702)と東郷古墳(008)の2基を含めた5基の古墳が存在する。油津港を見下ろす丘陵上に築かれた油津山上古墳は、日南市内では最古の古墳と考えられていたが、現在は存在しない。古墳時代終末期に至っては風田の海岸に近い砂丘上に立地し、現在は国立療養所日南病院の敷地内に存在する狐塚古墳(203)がある。この古墳については、平成6年度にその規模や性格を把握するために本調査を実施し、勾玉や切り子玉・耳環などの装飾品、辻金具・雲珠・轡などの馬具、鉄鏃・刀剣などの武具、須恵器・ハソウ・横瓶などの器類と多種多様な副葬品が検出された。中でも青銅製鏡2個や青銅製鈴3個の発見は、貴重で特に鏡についてはこれまで県内で2例の出土例が報告されているのみである。石室の大半は築造当時の原形をとどめていなかったものの残存する玄室の大きさでは、国指定特別史跡「鬼の窟古墳」や同じく特別史跡「千畑古墳」の玄室より一回り大きく県内最大であることが判明した。

横穴式石室の構築方法や出土遺物の畿内色の強いことなどを考慮していくと南九州と大和朝廷との関係を研究していく上では、非常に貴重な発見となった。

一方、日南市域では地下式横穴墓は、これまで確認されていない。また、集落遺跡も確認されていない。

奈良時代から平安時代までの遺跡は、あまり確認されていない。飢肥城下町遺跡(311)の調査で、平安時代の集落が確認されている。また、狐塚古墳(203)では石室内部を転用した形での平安時代の製塩遺構の跡が確認できる。同古墳の内部からは、布目庄痕土器片が約3,000点ほど出土している。この古墳からの出土以外では、約16ヶ所の市内に存在する遺跡から採集されている。

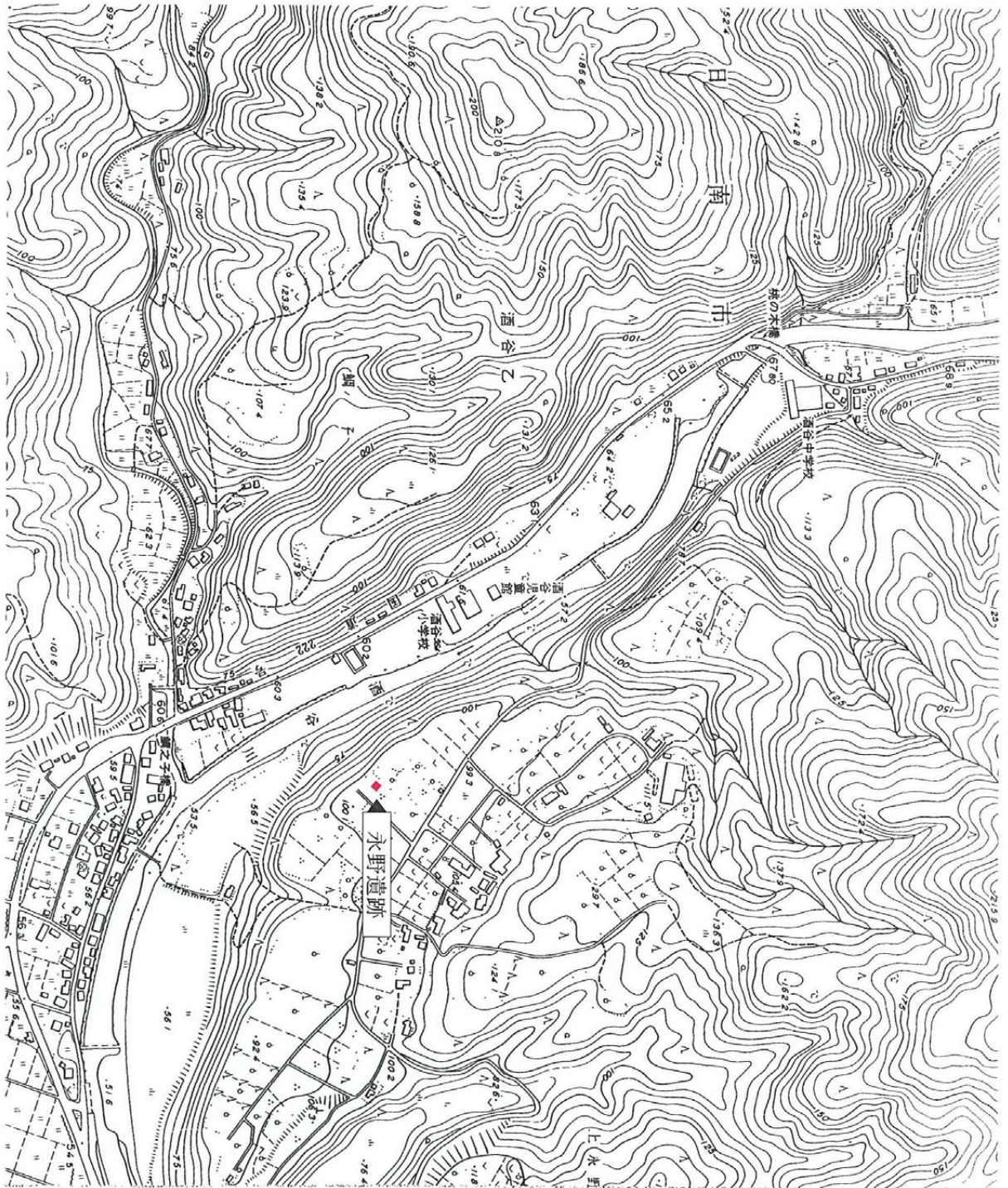
鎌倉時代以降は、山城を中心とした中世城館の遺跡が中心となってくる。現在約13ヶ所の山城及び城館が確認されている。飢肥城跡(310)、酒谷城跡(611)、新山城跡(402)などが代表的なものとして上げられる。平成11年度に本調査を実施した上城跡遺跡では、中・近世の堀立柱建物も7軒ほど検出されている。遺物としては、古いもので、15世紀頃の青磁や薩摩焼、肥前系染付などが検出されている。

近世に入ってからは、国の重要伝統的建造物群保存地区に指定されている飢肥城下町遺跡(311)がある。飢肥城は中世より薩摩藩島津氏と伊東氏が再三合戦を行い城主が入れ替わってきたが、伊東祐兵の入城以来は、400年間にわたり伊東氏により統治されてきた。飢肥地区には、長持寺廃寺跡(321)や大迫寺廃寺(322)などの寺院跡や大龍寺跡墓碑群、歓楽寺の墓碑群などがある。

《参考文献》

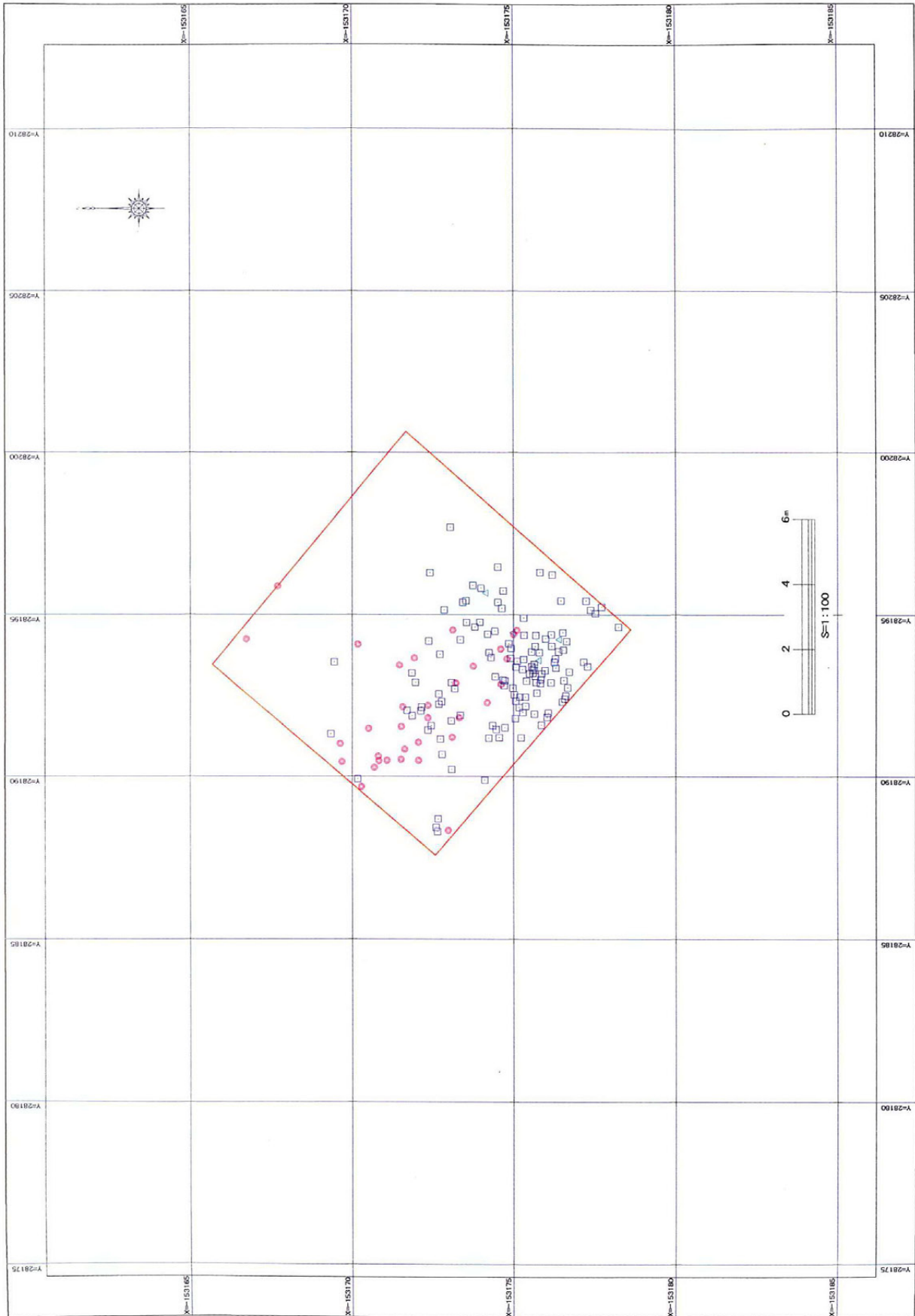
- (1) 『日南市埋蔵文化財調査報告書 第1集 日南市遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ』  
日南市教育委員会1990年3月
- (2) 『日南市埋蔵文化財調査報告書 第2集 日南市遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ』  
日南市教育委員会1993年3月
- (3) 『日南市埋蔵文化財調査報告書 第3集 飢肥城跡』 日南市教育委員会  
1994年3月
- (4) 『日南市埋蔵文化財調査報告書 第4集 日南市内遺跡発掘調査概報』  
日南市教育委員会 1995年3月
- (5) 『日南市埋蔵文化財調査報告書 第5集 上講遺跡』 日南市教育委員会  
1995年3月
- (6) 『日南市埋蔵文化財調査報告書 第6集 日南市内遺跡発掘調査概報』  
日南市教育委員会 1997年3月
- (7) 『日南市埋蔵文化財調査報告書 第7集 影平遺跡』 日南市教育委員会  
1997年3月
- (8) 『日南市埋蔵文化財調査報告書 第8集 日南市内遺跡発掘調査概報』  
日南市教育委員会 1998年3月
- (9) 『日南市埋蔵文化財調査報告書 第9集 大園遺跡』 日南市教育委員会  
1998年3月
- (10) 『日南市埋蔵文化財調査報告書 第10集 日南市内遺跡発掘調査概報』  
日南市教育委員会 1999年3月
- (11) 『日南市埋蔵文化財調査報告書 第11集 川辺ヶ野遺跡・堂之元遺跡・上鶴遺跡・木落遺跡』  
日南市教育委員1999年3月
- (12) 『日南市埋蔵文化財調査報告書 第12集 日南市内遺跡発掘調査概報』  
日南市教育委員会 2000年3月
- (13) 『日南市埋蔵文化財調査報告書 第13集 日南市内遺跡発掘調査概報』  
日南市教育委員会 2001年3月
- (14) 『日南市埋蔵文化財調査報告書 第14集 楠原坂ノ上遺跡』  
日南市教育委員会 2001年3月
- (15) 『日南市埋蔵文化財調査報告書 第15集 日南市内遺跡発掘調査概報』  
日南市教育委員会 2002年3月
- (16) 『日南市埋蔵文化財調査報告書 第16集 上城跡遺跡』  
日南市教育委員会 2002年3月
- (17) 『日南市史』 昭和53年1月30日 日南市
- (18) 『日本化石集 第23集 生痕化石』
- (19) 『日本化石図譜』
- (20) 『第3版 日南市の文化財』 日南市教育委員会  
2000年3月
- (21) 『日向地誌』 平部 嶺南 1977年（復刻） 青潮社

永野遺跡周辺地形図



第2図

永野遺跡調査区設定図



第4図

## 第2節 遺跡の概要

### 1. 基本層序

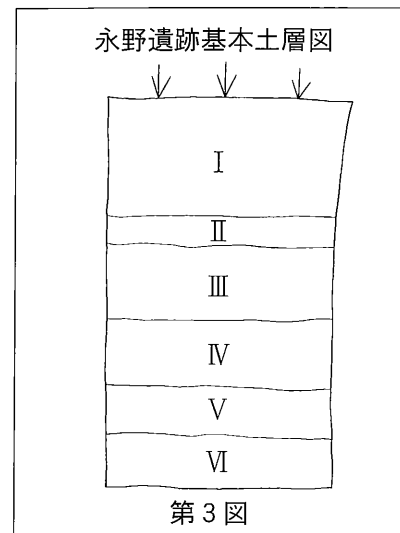
永野遺跡は、地質学的には日南市の西部に広がる日南層群の上部に形成され、小松山系の東南部に派生する酒谷川の河岸段丘上遺跡である。

調査対象地は、携帯電話無線基地局の建設地であったため、一辺が約10メートル程の正方形地で約100㎡弱の調査面積であった。最初に携帯電話無線基地局を建設するはずだった地点は、諸般の事情により建設できなくなったので、当初計画地より、東へ約20メートルほど移動した地点を本調査対象地とした。

調査地は、結果的にはわりと角度を有する傾斜地であったため、南側では、比較的浅いレベルで遺物が検出されたが、北側では、かなりの深度まで、遺物包含層が広がった。アカホヤ層上部では、特に南側で攪乱を受けていたため、縄文時代後期の市来式土器、弥生土器、土師器等破片が同レベルで検出された。

また、アカホヤ火山灰層はしっかりと確認され、火山灰層直下の層序からは貝殻文系土器を中心とした縄文時代早期の遺物が確認された。

- I層：耕作土 10Y R 2/1 黒褐色
- II層：耕作土混じり 7.5Y R 2/1 黒色
- III層：II層より強い粘質土 7.5Y R 3/2 黒褐色
- IV層：遺物包含層 粘質土 10Y R 1.7/1 黒色
- V層：アカホヤ火山灰層 7.5Y R 5/8 暗褐色
- VI層：遺物包含層 5層中一番強い粘質土 7.5Y R 2/1 黒色



### 2. 調査区設定及び遺構

遺跡が立地するこの酒谷川両岸に広がる河岸段丘は、標高約100メートル程の平坦な茶畑として利用されている。南側に面して広がる平坦な立地は、その全体が茶畑として利用されており、遺跡の立地環境としても良好な場所である。

今回の調査対象地は、一辺が9.4メートルほどの正方形を呈しているが、面積が狭いため、特に区域分けなどは行わずに調査を実施した。

本調査は、まず、調査対象地内のお茶の木を伐採し、その樹根により地下の遺物包含層へ影響がでないように慎重に撤去することから始まった。その後、耕作土を重機にて約10センチ～20センチずつ剥がしてゆき、遺物包含層の上部にて重機による表土撤去は終了させた。その後は、人力により少しずつ埋土を削平していき、遺構及び遺物の検出に努めた。アカホヤ火山灰層上部では、遺構は特に検出されなかった。また、アカホヤ火山灰層下部においても同様に遺構・遺物の検出に努めた。しかし、本調査の結果としては、アカホヤ火山灰層直下からは、集石遺構のものと思われる焼け石などが約120点近く検出されたものの遺構としては、何も確認されなかった。

### 3. 遺物

#### (ア)土器

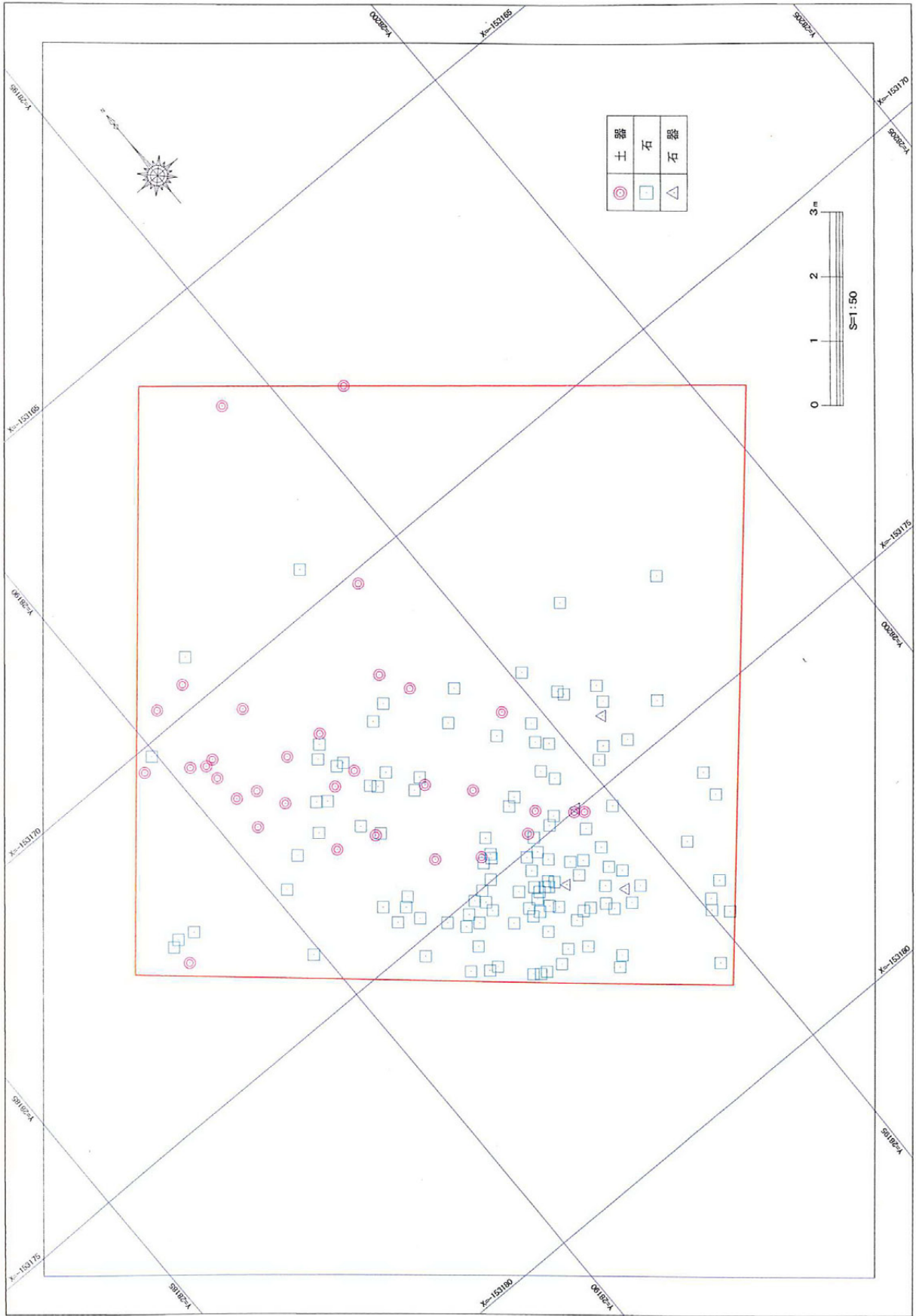
永野遺跡では、アカホヤ火山灰層上部から攪乱を受けていた影響で縄文後期～古墳時代までの遺物が検出された。弥生式土器や土師器などについては、数点の小さな破片であるため、型式の特定などについては特に言及しない。縄文時代後期については、市来式土器の破片が検出されている。これまで本調査を実施した市内のいくつかの遺跡からも多数検出されている型式の土器である。

アカホヤ火山灰層下部からは、6点ほどの遺物が検出された。そのうち顕著なものは、貝殻文系の土器があげられる。型式などについては、特に言及をささない。

#### (イ)石器

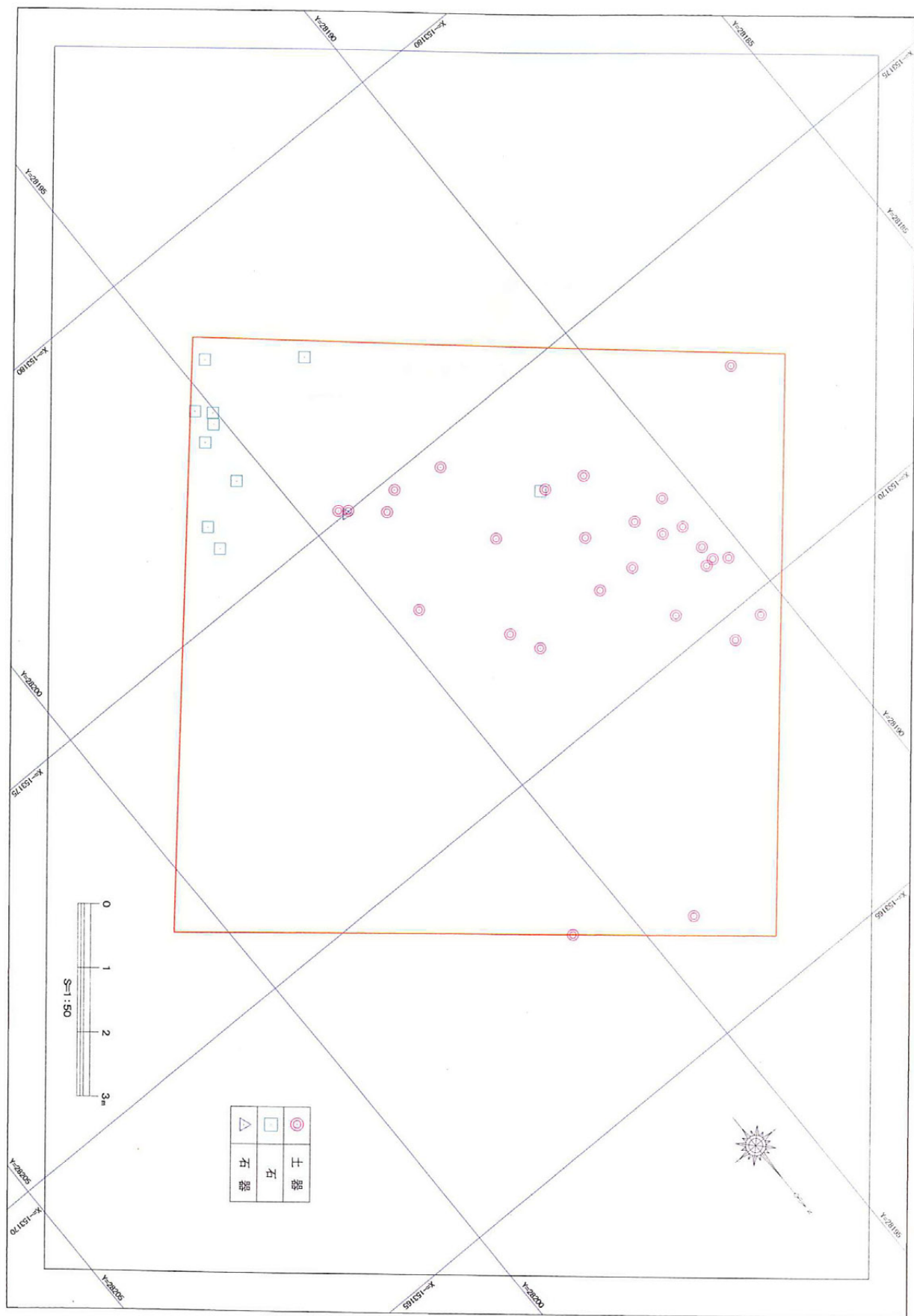
永野遺跡では、アカホヤ火山灰層下部からのみ石器が検出された。石鏃や剥片石器などは検出されず、主なものは、敲き石・磨石などである。

永野遺跡出土遺物分布図



第5図





第6図

## 第III章 調査

### 第1節 遺構

前述したように、永野遺跡では、遺構としては特に検出されなかった。しかし、アカホヤ火山灰層下部からは、集石遺構を構成していたのではないかと推定される焼け石が120点余り検出された。

### 第2節 遺物

永野遺跡では、アカホヤ火山灰層がしっかりと確認され、その上層と下層に遺物が検出された。土器についてみると、前述のとおり、上層では弥生式土器、市来式土器などが検出され、多時代の遺物が攪乱層に混在して検出された形となった。アカホヤ火山灰層の下部については、攪乱は見られず、検出された土器は少なかつたものの縄文時代早期の遺物として特定できる。石器についてもアカホヤ火山灰層下部からのものがほとんどで、これについても縄文時代早期として特定できうる資料である。以下詳細について述べる。

(ア)土器

#### 1. 古墳時代～弥生時代（第9図）

14は、古墳時代土師器の底部片である。器系は、判断しづらいが皿ではないかと思われる。焼成は、非常に悪い。摩耗が激しいが、底部に糸切り痕がみられる。

15は、弥生時代の甕で口縁部である。外面はすすで覆われており、内面は横方向の丁寧なナデ調整の跡がみられる。

#### 2. 縄文時代後期（第9図）

1は、口縁部の破片で、平坦な形状をとる。外面は、横方向の貝殻上根を施し、その下部に斜位方向の貝殻刺突文を施す。内面は、横方向の丁寧なナデ調整の跡がみられる。焼成は、良好である。

2は、口縁部の破片で腰部分で「くの字」を呈する。また、口縁部上端で山形に尖る。外面は、山形に尖る口縁部に沿って斜めに貝殻条痕を施し、その下部に斜位方向の貝殻刺突文を施す。内面も貝殻条痕による丁寧なナデ調整の跡がみられる。外面、内面とも焼けてすすが多量に付着している。

3は、胴部の破片と思われる。外面には、横方向の貝殻条痕の跡がみられる。内面もナデ調整の跡がみられる。

5は、平坦な形状をとる口縁部の破片である。口縁部直下にて3条ほどの貝殻条痕の跡がみられ、その下部に斜位の貝殻刺突文がみられる。内面も横方向の貝殻条痕による調整の跡がみられる。焼成は、良好である。

6は、口縁部付近の破片で腰部分で「くの字」を呈する。外面は、丁寧なナデ調整の跡に破片上部の口縁部付近で斜位方向の貝殻刺突文がみられる。内面も横方向の貝殻条痕がみられる。焼成は良好で、内面にすすの跡が多くみられる。

7は、出土状況から縄文後期の破片と思われる。外面は、ヘラ状工具による沈線文が幾何学的に施されている。内面は、横方向の調整痕がみられる。焼成は良好である。

8は、口縁部付近の破片で、内外面ともに横方向の貝殻条痕がみられる。焼成は、良好である。

9、10は、ともに胴部の破片である。双方とも出土状況から縄文後期のものとは思われるが特に施文などは、みられない。焼成は、良好である。

11は、口縁部付近の破片である。外面には横方向の貝殻条痕がみられる。内面も横方向の貝殻条痕がみられ、焼成は、良好である。

12、13は、ともに胴部の破片である。双方とも出土状況から縄文後期のものとは思われるが特に施文などは、みられない。焼成は、良好である。

17は、口縁部の破片である。外面は、摩耗が激しく文様は確認できない。内面は、横方向の貝殻条痕による調整の跡がみられる。焼成は、良好である。

18、19、20、21は、すべて胴部の破片である。特に文様のみとめられるものはないが、焼成は良好である。

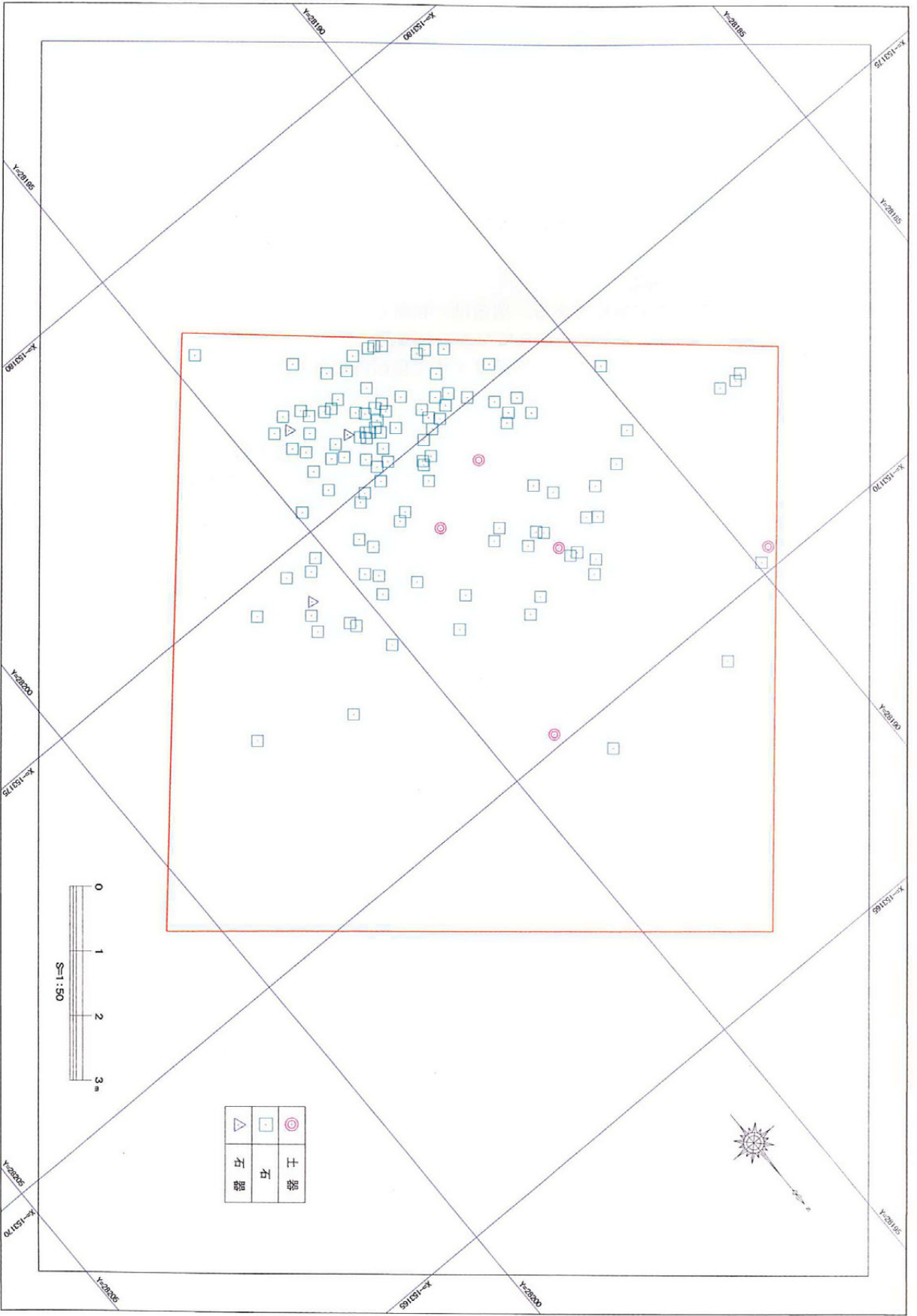
#### 3. 縄文時代早期（第10図）

4は、口縁部付近の破片である。外面は、横方向の貝殻条痕と斜位の貝殻刺突文が交互に2段施文されている。内面も横方向の貝殻による調整の跡がみられる。焼成は、良好である。

16は、胴部の破片と思われる。外面には特には文様はみられない。内面は、横方向のナデ調整の跡がみられる。焼成は良好である。

22は、胴部の破片と思われる。外面には特には文様はみられない。内面は、斜めや横方向の指跡状の調整痕がみられる。焼成は良好である。

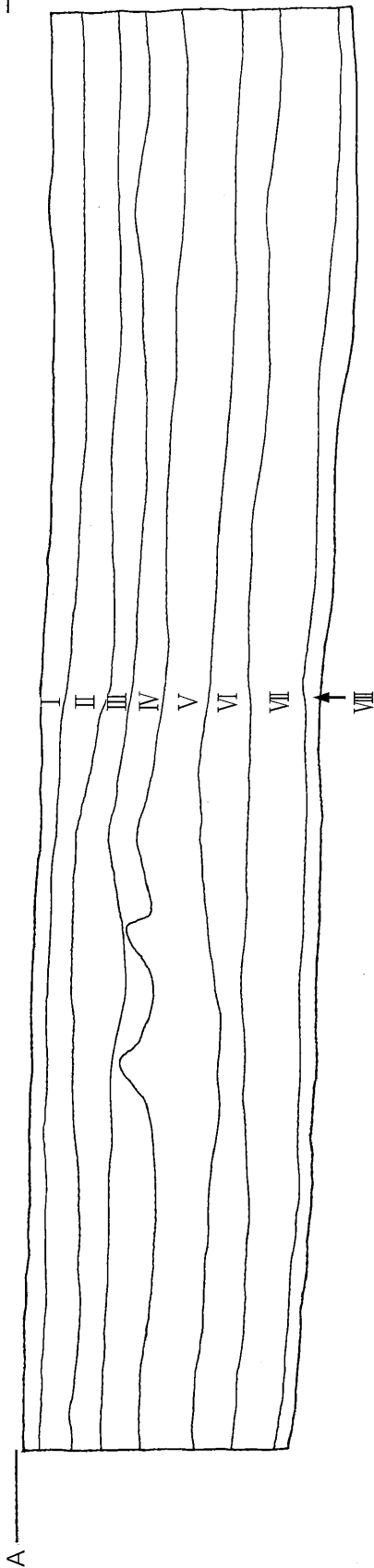
永野遺跡アカホヤ層下部出土遺物分布図



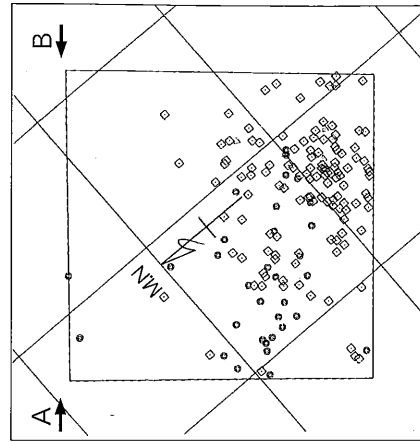
第7図

土層断面図 (北西～南東断面)

L=99.3m  
A-----B



INDEX



- I: 7.5 YR 2/1 黒色  
耕作土
- II: 10 YR 1.7/1 黒色  
耕作土
- III: 10 YR 1.7/1 黒色  
遺物包層
- IV: N 遺物包層 1.5/0 黒色
- V: 7.5 YR 3/4 暗褐色  
アカボヤ火成層
- VI: 10 YR 1.7/1 黒色  
遺物包層 粘質土
- VII: 7.5 YR 2/1 黒褐色  
遺物包層 VI層より強い粘質土
- VIII: 10 YR 3/4 褐色  
I層中一番強い粘質土

第8図

23は、口縁部付近の破片と思われる。外面は、横方向の貝殻条痕がみられる。内面は、横及び斜位方向の貝殻条痕がみられる。焼成は、良好である。

#### (イ)石器

##### 1. 敲石（第11図）

敲石は、2点検出された。2点ともアカホヤ火山灰層下部から検出された。1は、最大幅6.6センチ、最大長10.8センチを測る。四隅の角には、使用痕の跡がみられる。石材は、砂岩である。2は、最大幅3.7センチ、最大長12.8センチを測る。上下端に敲による使用痕の跡がみられる。石材は、砂岩である。

##### 2. 磨石（第11図）

磨石は、合計で2点検出された。3と4は、アカホヤ火山灰層下部から検出された。

3は、最大幅5.8センチを測り、最大長6.9センチを測る。両面とも磨石として使用されていた痕跡がみられる。石材は、チャートである。4は、全体的に赤く火を受けたような色を呈している。最大幅は4.8センチを測り、最大長は7.3センチを測る。磨石としては片面のみを使用していたようである。また、上部突端は、敲石として兼用した痕跡もみられる。

## 第IV章 まとめにかえて

永野遺跡出土の遺物は、その大半がアカホヤ層上部からの出土である。しかし、この層位から出土した遺物は、縄文時代後期～古墳時代までと幅広い。また、アカホヤ層下部については、層位的には縄文時代早期と特定できる遺物も数点検出できた。

今回の調査は、縄文時代早期の良好な遺跡の調査であったが、調査対象面積が非常に狭いことと結果的に調査地が傾斜地となったため、遺構などは検出はされなかった。

遺物についても、その数が非常に少なく、型式を断定するには破片が小さい等、判断材料に乏しいものが多かった。アカホヤ火山灰層上部の攪乱層からの出土ではあったが、市来式土器についてみるといくつか特徴的なものが検出された。平成13年度に本市にて刊行した上城跡遺跡報告書における分類によれば、2と6が市来式土器Ⅰの類土器に比定され、1及び5が市来式土器Ⅲ類土器に分類される。縄文時代早期の遺物は、年代を確定できる資料であったが、貝殻文系の土器であることは判断されるものの特に型式を特定できるほどの資料には恵まれなかった。石器についても磨石と敲石がそれぞれ2点ずつ検出され、共伴する遺物や層位的に縄文時代早期のものと断定はできるが、これまで検出されている早期の石器類と特に顕著な違いはみられなかった。

本調査結果をふりかえてみると遺構に伴う状況で遺物が検出されず、型式を分類するほどのバリエーションと出土量が得られなかった調査であった。酒谷地区の縄文時代早期の様相がわずかながら判明したものの今後の資料の増加を待って比較検討を行うこととしたい。

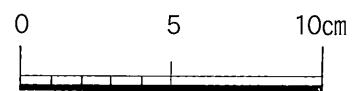
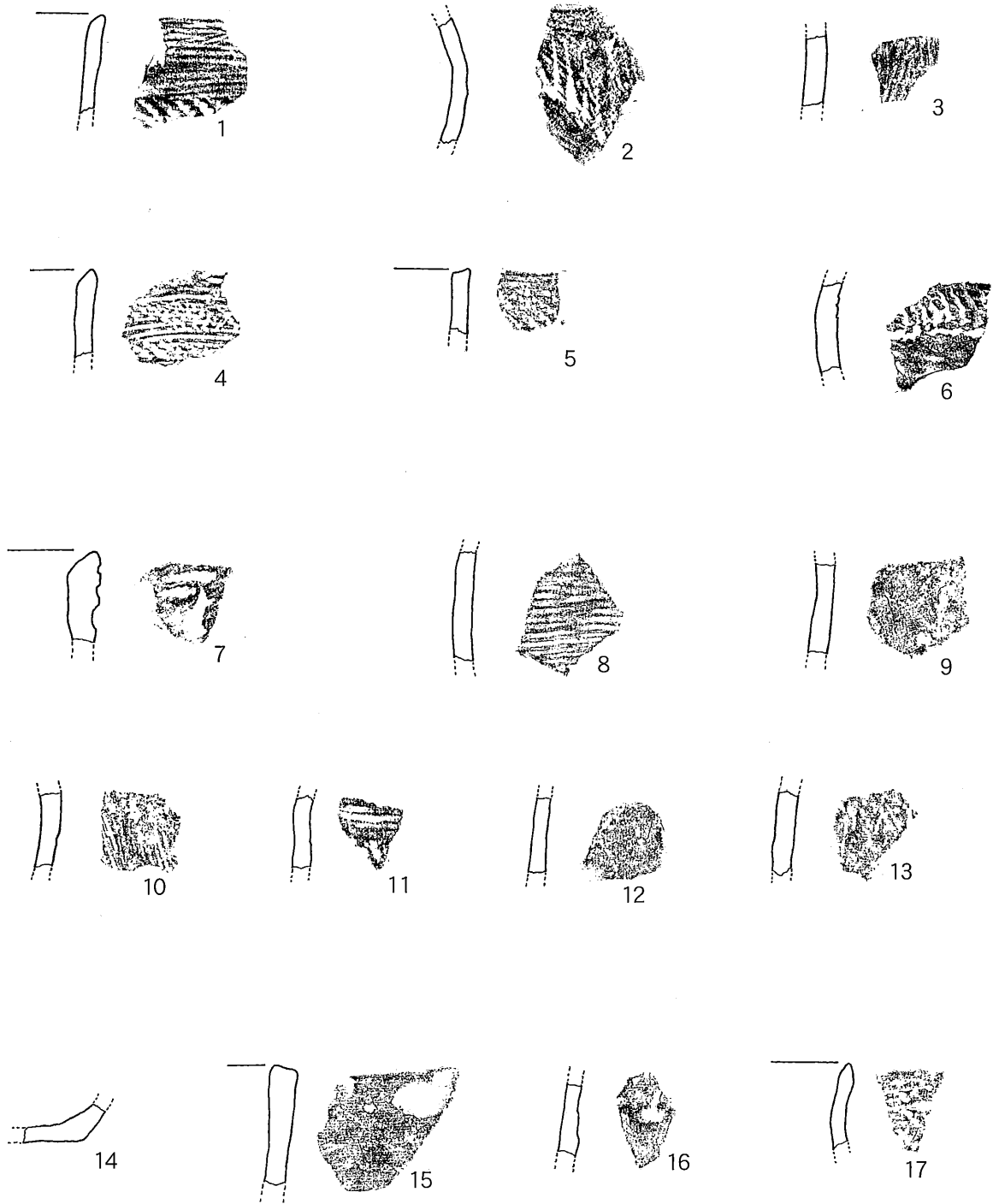
日南市内では、これまで縄文時代を主たる時代とする遺跡の本調査を数カ所行ってきた。特に最近では、酒谷川沿いに2箇所の本調査を実施している。ひとつは、平成8年度に調査を実施した「川辺ヶ野遺跡」、いまひとつは平成11年度に調査を実施した「上城跡遺跡」である。双方とも縄文時代早期の遺跡で、川辺ヶ野遺跡では7基の集石遺構が検出され、貝殻文系の土器も検出され、本市でまとまって集石遺構が検出されたのは、この遺跡が初めてであった。その後調査された上城跡遺跡では、集石遺構は、3基しか検出されなかったものの貝殻文系土器が多数検出された。特に加栗山式土器についてまとまった量が検出され、分類が行えたのは、本市ではこの上城跡遺跡が初めてであった。こういった近年の調査結果をふまえた上で、永野遺跡の調査結果を考慮すると日南市内における縄文時代早期の様相が点から面へ広がりをもせたという点では、非常に評価すべき調査結果になったのではないと思われる。

今回の調査結果は、本市の縄文時代の様相を研究する上で、貴重な追加資料となった。

#### 【参考文献】

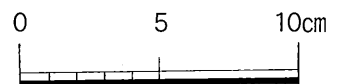
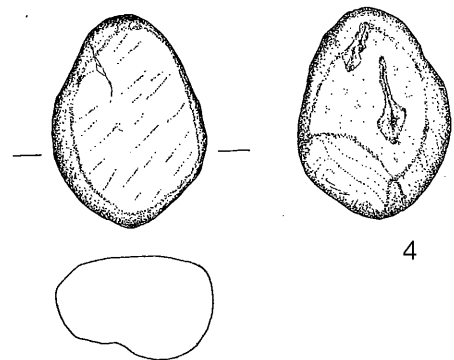
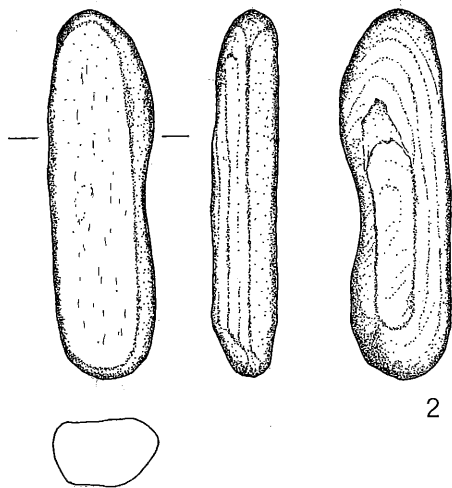
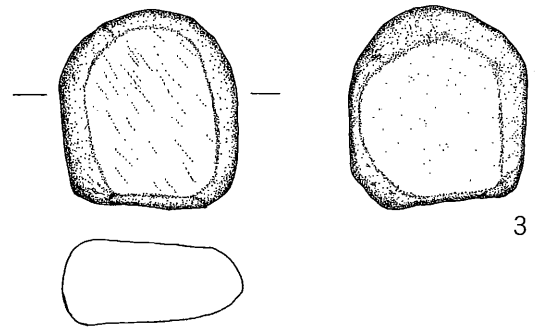
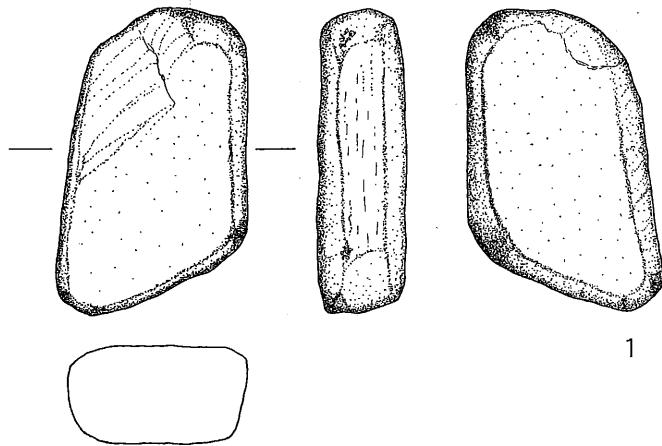
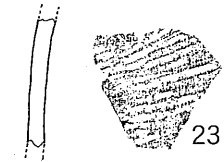
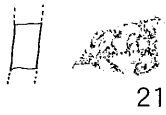
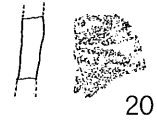
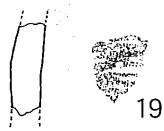
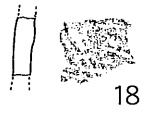
- 宮崎県埋蔵文化財センター 1998年 『荒迫遺跡』 「宮崎フリーウェイ工業団地造成事業に伴う発掘調査報告書」
- 宮崎県埋蔵文化財センター 1998年 『市位遺跡』 「希望ヶ丘西区画整理事業に伴う発掘調査報告書」
- 宮崎県埋蔵文化財センター 1999年 『牧の原第2遺跡』 「総合農業試験場畑作園芸支場整備事業に伴う発掘調査報告書」
- 宮崎県埋蔵文化財センター 1999年 『内屋敷遺跡』 「県立小林高等学校生徒寮建設に伴う発掘調査報告書」
- 宮崎県埋蔵文化財センター 1999年 『鶴野内中水流遺跡』 「特定交通安全施設整備事業に伴う発掘調査報告書」
- 宮崎県埋蔵文化財センター 1999年 『神殿遺跡B、C地区、南平第3遺跡、南平第4遺跡、中ノ原遺跡』 「一

出土遺物実測図 (その1)



第9図

出土遺物実測図 (その2)



第10図

		般国道218号線高千穂バイパス建設に伴う発掘調査報告書」
宮崎県埋蔵文化財センター	2000年	『上の原第2遺跡、上の原第1遺跡、上の原第4遺跡、白ヶ野第3遺跡A地区』「時屋地区農地保全整備事業に伴う発掘調査報告書」
宮崎県埋蔵文化財センター	2000年	『竹ノ内遺跡』「一般県道清武インター線道路改良事業に伴う発掘調査報告書」
宮崎市教育局委員会	1998年	『二月田遺跡、芋字遺跡』「県営担い手育成基盤事業 富吉地区に伴う発掘調査報告書」
宮崎市教育局委員会	1999年	『熊野第2遺跡』
宮崎市教育局委員会	1999年	『東宮遺跡』「東宮土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書」
宮崎市教育局委員会	1999年	『下郷遺跡』
宮崎市教育局委員会	2000年	『黒太郎遺跡』
都城市教育局委員会	1995年	『丸谷地区遺跡群 上大五郎遺跡』「丸谷地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告書」
都城市教育局委員会	1996年	『加治屋遺跡2』
都城市教育局委員会	1996年	『丸谷地区遺跡群 中大五郎第1遺跡、中大五郎第2遺跡、本池遺跡、前畑遺跡』「丸谷地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告書」
都城市教育局委員会	1997年	『大浦遺跡』「道路建設事業「臨時地方道整備事業」に伴う発掘調査報告書」
鹿児島県立埋蔵文化財センター	1997年	『神野牧遺跡』「県道鹿屋環状線改修工事に伴う発掘調査報告書」
鹿児島県立埋蔵文化財センター	2000年	『沖田岩戸遺跡』「高柳中小河川改修工事に伴う発掘調査報告書」
日南市教育局委員会	1998年	『大園遺跡』「農村資源活用農業構造改善事業日南市都市農村交流センター建設に伴う発掘調査報告書」
日南市教育局委員会	1999年	『堂之元遺跡、川辺ヶ野遺跡、上鶴遺跡、木落遺跡』「九州電力株式会社宮崎支店66kv飫肥～福島線送電線新設工事に伴う発掘調査報告書」
日南市教育局委員会	2002年	『上城跡遺跡』



第2表 出土土器観察表

掲載 番号	器 種	部 位	胎 土	焼成	調 整		色 調		備 考
					外 面	内 面	外 面	内 面	
1	深鉢型 土 器	口縁部	細砂粒を含む 長石・石英・角閃石 を含む	良好	ナデ	横方向の 貝殻条痕	5YR 4/3 にぶい赤褐色	7.5YR 4/3 褐色	口唇部に横方向の貝殻条痕 口縁部に3列の貝殻復縁刺突文
2	深鉢型 土 器	口縁部	細砂粒を含む 長石・石英・角閃石 を含む	良好	ナデ	横方向の ナデ	5YR 3/3 暗赤褐色	10YR 2/1 黒色	口縁部に斜位の貝殻復縁刺突文
3	?	胴 部	細砂粒を含む 雲母・長石・石英・ 角閃石を含む	良好	ナデ	横方向の 貝殻条痕	5YR 5/4 にぶい赤褐色	2.5YR 5/6 明赤褐色	
4	深鉢型 土 器	口縁部	細砂粒を含む 長石・石英・角閃石 を含む	良好	ナデ	横方向の貝 殻条痕	5YR 4/4 にぶい赤褐色	2.5YR 5/6 明赤褐色	貝殻復縁刺突文と貝殻条痕が交 互に2段
5	?	口縁部	細砂粒を含む 長石・石英・角閃石 を含む	良好	ナデ	ナデ	7.5YR 5/4 にぶい褐色	5YR 5/4 にぶい赤褐色	斜位の貝殻復縁刺突文
6	?	口縁部 付 近	細砂粒を含む 長石・石英・角閃石 を含む	良好	ナデ	横方向の ナデ	5YR 5/4 にぶい赤褐色	7.5YR 3/1 黒褐色	斜位の貝殻復縁刺突文
7	?	口縁部	細砂粒を含む 長石・石英・角閃石 を含む	良好	横方向の ナデ	横方向の ナデ	5YR 4/4 にぶい赤褐色	5YR 4/6 赤褐色	沈線文
8	?	胴 部	細砂粒を含む 長石・石英・角閃石 を含む	良好	ナデ	横方向の 貝殻条痕	2.5YR 5/6 明赤褐色	5YR 5/4 にぶい赤褐色	横方向の貝殻条痕
9	?	胴 部	細砂粒を含む 長石・石英・角閃石 を含む	良好		横方向の 貝殻条痕	7.5YR 5/4 にぶい褐色	10YR 5/3 にぶい黄褐色	
10	?	胴 部	細砂粒を含む 長石・石英を含む	良好			5YR 4/4 にぶい赤褐色	7.5YR 4/2 灰褐色	
11	?	口縁部 付 近	細砂粒、雲母を含む 長石・石英を含む	良好	ナデ	ナデ	5YR 5/4 にぶい赤褐色	5YR 5/4 にぶい赤褐色	横方向の貝殻条痕
12	?	胴 部	細砂粒を含む 長石・石英を含む	良好	ナデ		10YR 6/3 にぶい黄褐色	10YR 5/3 にぶい黄褐色	
13	?	胴 部	細砂粒を含む 長石・石英を含む	良好			5YR 4/4 にぶい赤褐色	5YR 5/4 にぶい赤褐色	
14	皿?	底 部	細砂粒を含む	良好			7.5YR 6/4 にぶい橙色	7.5YR 6/6 橙色	糸切りの痕
15	鉢	口縁部	細砂粒を含む 雲母を含む	良好			10YR 3/1 黒褐色	7.5YR 5/4 にぶい褐色	外面はさすが多量に付着
16	?	胴 部	細砂粒を含む 長石・石英・角閃石 を含む	良好			5YR 4/4 にぶい赤褐色	10YR 3/2 黒褐色	
17	深鉢型 土 器	口縁部	細砂粒を含む 長石・石英・角閃石 を含む	良好	ナデ	横方向の 貝殻条痕	7.5YR 4/3 褐色	10YR 4/2 灰黄褐色	
18	深鉢型 土 器	胴 部	細砂粒・雲母を含む 長石・石英を含む	良好	ナデ	ヘラナデ	7.5YR 4/3 褐色	7.5YR 5/4 にぶい褐色	
19	深鉢型 土 器	胴 部	細砂粒を含む 石英・角閃石を含む	良好	ナデ	ヘラナデ	5YR 5/4 にぶい赤褐色	5YR 4/3 にぶい赤褐色	
20	深鉢型 土 器	胴 部	細砂粒・雲母を含む 長石・石英を含む	良好	ナデ	ヘラナデ	5YR 5/4 にぶい赤褐色	7.5YR 5/4 にぶい褐色	
21	深鉢型 土 器	胴 部	細砂粒を含む 長石・石英を含む	良好	ナデ	ヘラナデ	5YR 4/4 にぶい赤褐色	7.5YR 5/4 にぶい褐色	
22	深鉢型 土 器	胴 部	細砂粒を含む 雲母・長石・石英を 含む	良好	ナデ	横方向の ナデ	7.5YR 4/3 褐色	10YR 3/2 黒褐色	
23	深鉢型 土 器	胴 部	細砂粒を含む 長石・角閃石を含む	良好	ヘラナデ	ヘラナデ	7.5YR 4/2 灰褐色	7.5YR 4/2 灰褐色	横方向の貝殻条痕

永野遺跡調査前全景（航空写真）



図版 1

永野遺跡調査後全景（航空写真）



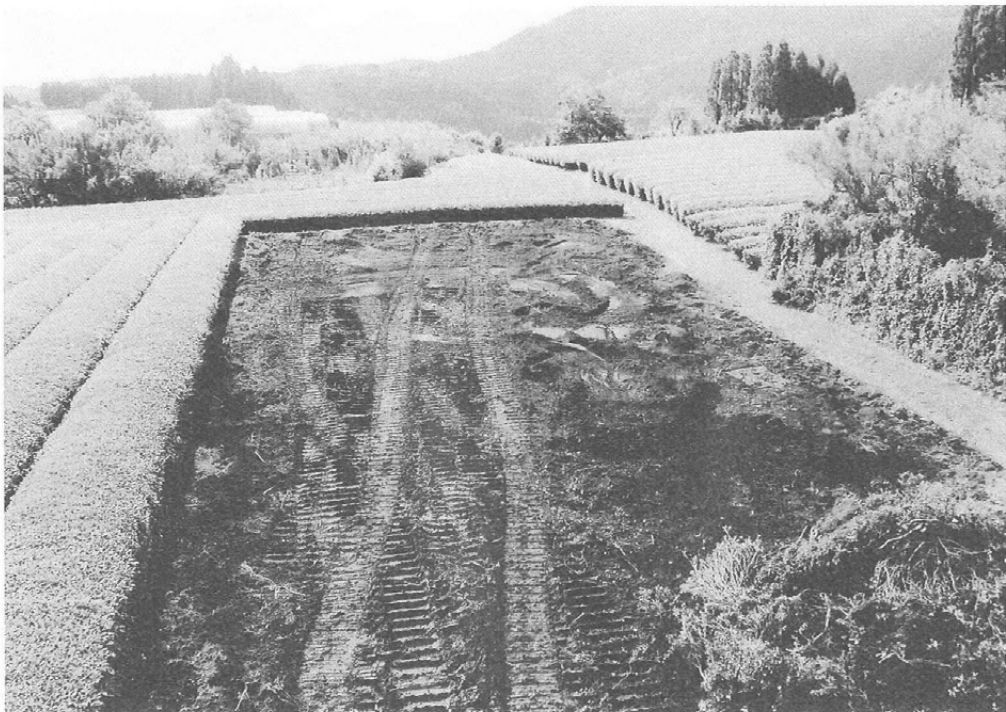
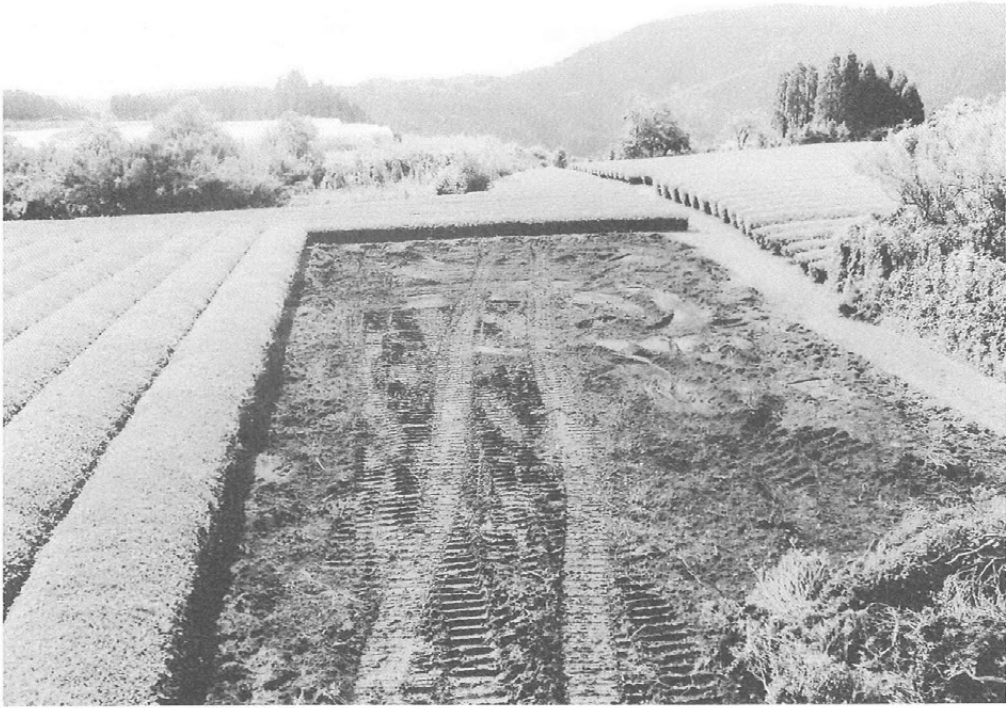
図版 2

土層断面（北西～南東断面）



図版 3

着工前状況



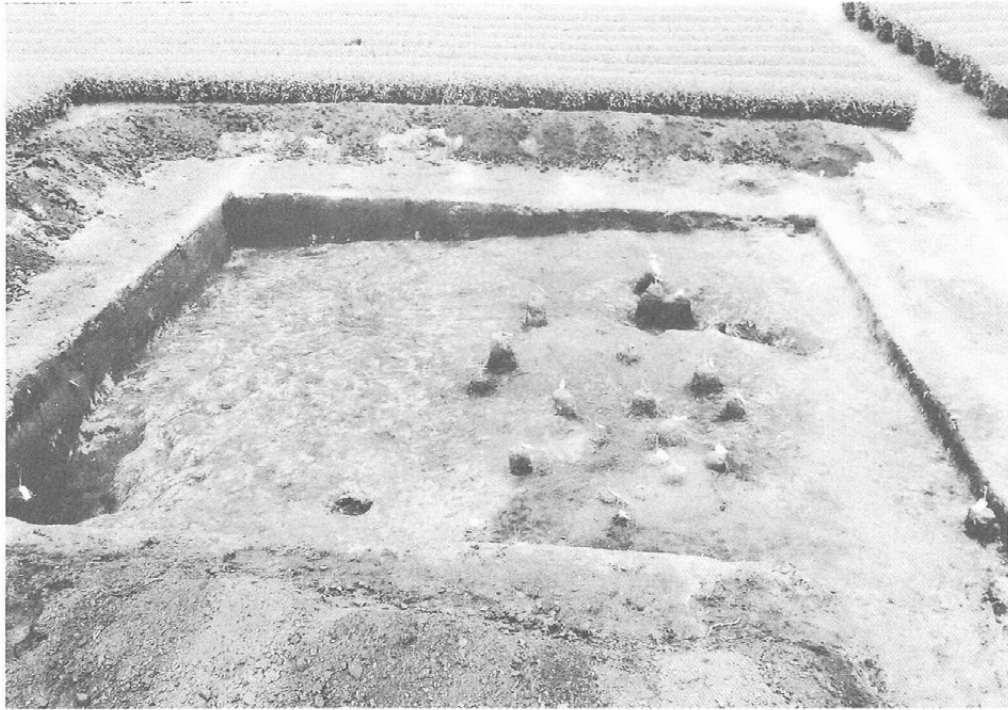
図版 4

アホヤ層上部遺物検出作業状況



図版 5

アカホヤ層上部遺物検出状況



図版 6

アホヤ層下部遺物検出作業状況



図版 7

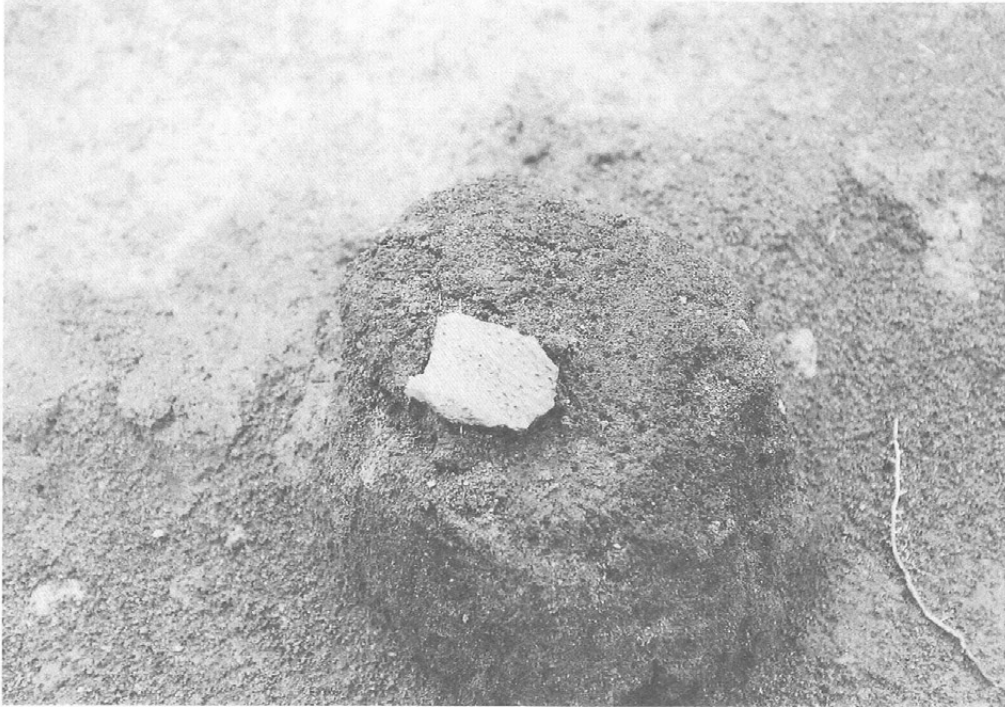


アカホヤ層下部遺物検出状況



図版 8

アカホヤ層下部遺物検出状況及び完掘状況



図版 9

発掘調査体験学習の様子（酒谷小学校のみなさん）



図版10

発掘調査体験学習の様子（飫肥城下町文化財愛護少年団のみなさん）



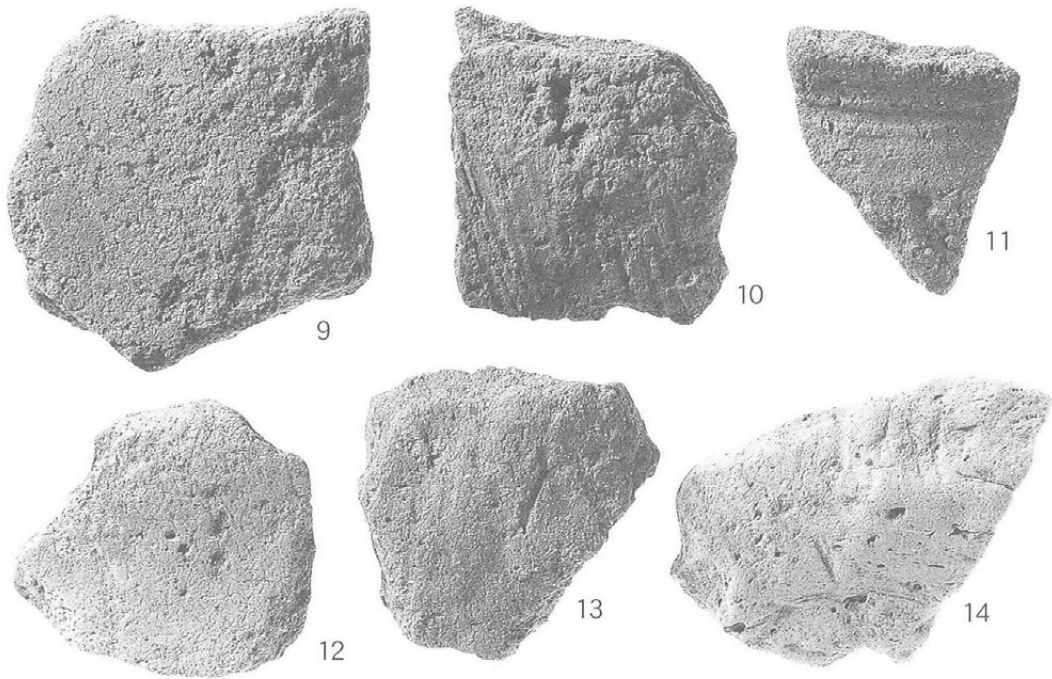
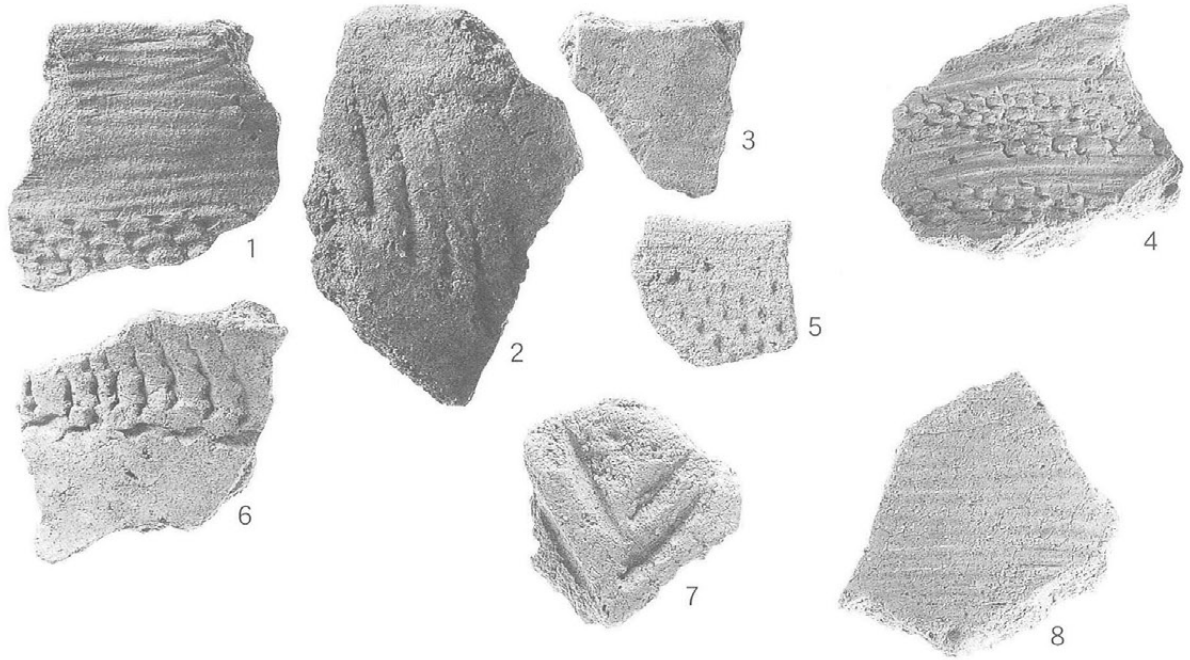
図版11

出土遺物測量及び取り上げ作業の状況



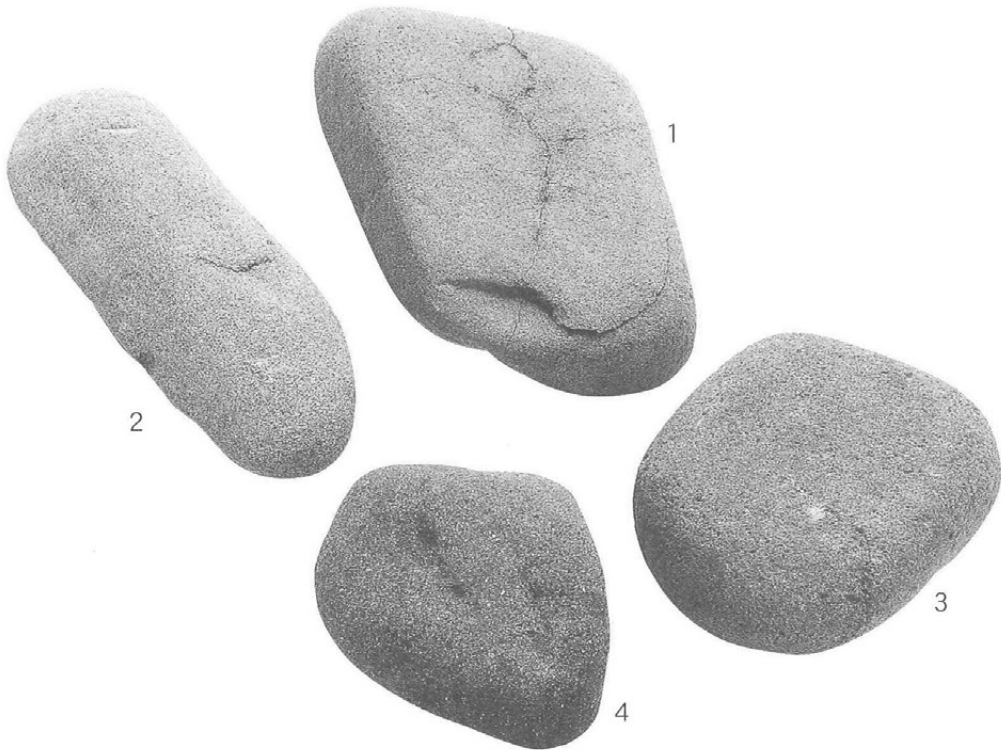
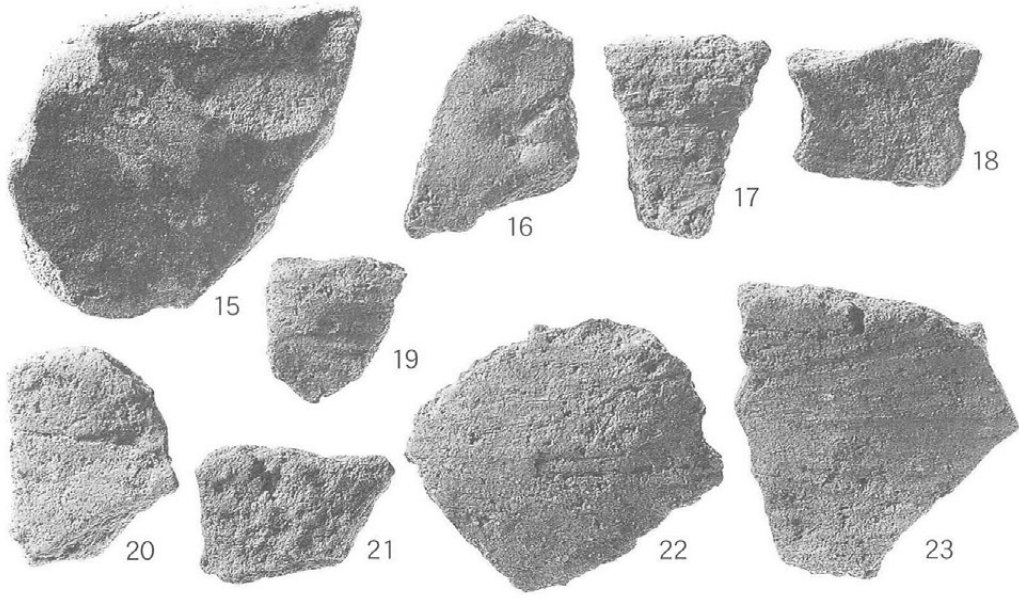
図版12

出土遺物 (土器)



図版13

出土遺物 (土器、石器)



图版14

# 報告書抄録

ふりがな	ながのいせき							
書名	永野遺跡							
副書名	株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ九州携帯電話無線基地局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	日南市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第18集							
編著者名	的場丈明							
編集機関	日南市教育委員会							
所在地	〒887-8585 宮崎県日南市中央通1丁目1-1 TEL: 0987-31-1145 FAX: 0987-24-0987							
発行年月日	2003年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。'。"	東経 。'。"	調査期間	調査 面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
ながのいせき 永野遺跡	にちなんし おおあざ 日南市大字 さかたにこう 酒谷甲10-2	日南市	615	31°37'04"	131°17'50"	平成12年 8月8日 ～ 平成12年 9月22日	125	携帯電話 無線基地 局建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
永野遺跡	散布地	縄文時代早期～縄文時代後期	特になし		縄文時代早期  縄文時代後期 ・市来式土器			

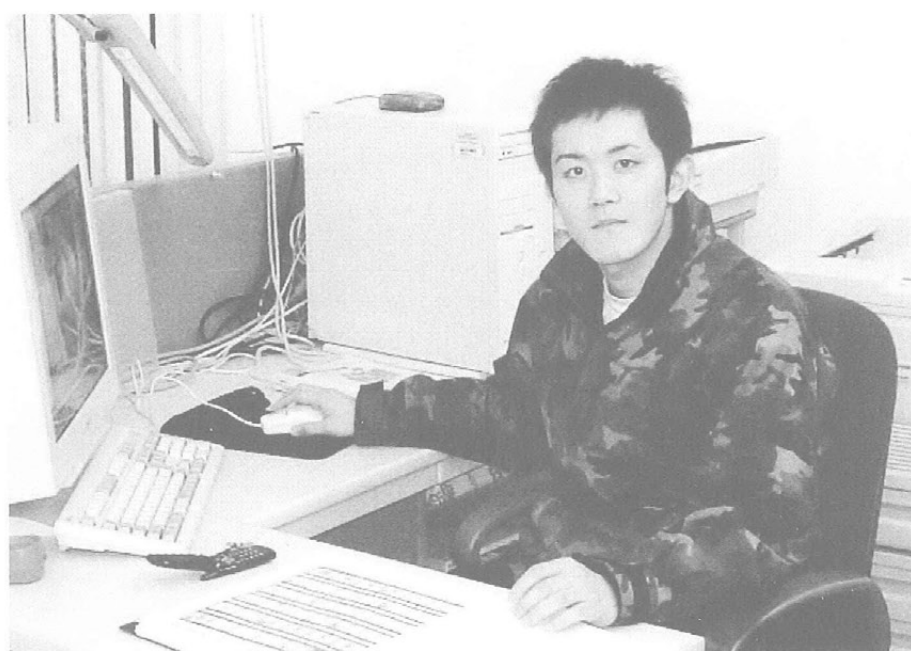


調査にご協力いただいたみなさん



大田原俊太郎 黒木 正男 岩永 典良 谷口キヨ子 杉元 早苗 鎌田留次郎  
金丸恵美子 平川フミヲ 長友ヤツミ 鎌田 和枝  
黒木 カヨ 倉元ハルエ 前田マサ子 山室 光

整理作業にご協力いただいたみなさん



山内 豊喬

日南市埋蔵文化財調査報告書 第18集

# 永 野 遺 跡

2003年3月

編集発行 日南市教育委員会  
〒887-8585 日南市中央通1丁目1番地1  
電 話 0987-31-1145

印 刷 (有)日南新生社印刷  
〒887-0014 日南市岩崎1丁目3-1  
電 話 0987-31-1550

